

福井久蒔著

大日本歌学史

不二書局梓

序

福井君の大日本歌學史が刊行せらるることになつて、まことに喜ばしい。同君は家庭に一子も無く、朝夕書籍にばかり親しんでその研究を續けて行かれるので、積り積つて未定の原稿は堆いほどあるさうである。多くは日本の文化史の上の研究で、本書の如きも、その一部分と見做すべきであらうと思ふ。今や外國の文學その他の思想を傳へ、翻譯を公にすることが可なり盛であるに關らず、我が古代文化を闡明するといふ方面は割合に振はない。又その研究に没頭する學者も少い。私は福井君をづつと前から知つてゐる。そうしてその人格を尊重し、本書の出版を國家の爲に慶賀し、尙續々その稿

本の世に出ることを心から祈つてゐる。

大正十二年七月三十日

芳

賀

矢

一

し
る
す

はしがき

この書は寧樂時代より明治の大御代の終に至る千有餘年に於ける我が歌學の起原發達沿革を論述したものである。

凡そ歌學の史的 연구には種々の方法がある。斯界に於ける偉人の著作に就いて、その内容の批判を試みつつ、年次を逐ひて系統を立ててゆく態度方法がある。又歌學の範疇を定め、その中に包含すべき要項を分け置きて、古來の學者の唱道した説を各要項毎に擧げ、その問題に對する學者の見解がいかん展開し分化していつたかを明にする態度方法もある。又かかる學説や著書が發生するに至つた社會相及その必然的の根本理由を旨と究めつつ系統を立ててゆく態度方法もある。

和歌式や髓腦が中古の歌合の判などにいかに影響したか、詠歌大概や毎月抄が近古の歌人にいかに遵奉され釋明されたか、國歌八論が近世學者の幾多の批評を醸し、そ

れにつれて歌學一般の進歩を來たしたかと究めゆく如きは第一法である。又歌とは何ぞやといふ問題に對し、貫之・公任はいかに考へ、宣長・御杖はいかにこれを論じたか。和歌と擇詞とに就き、眞淵と蘆庵とはいかに異なつた考を抱いてゐたか。桂園派と古學派との間には調に就いていかに論争し合つたか。又それらの問題が最初いかなる風ニ考へられいかに展開していつたかを究める如きは第二法である。又戰亂の永い間うち續いた爲に文化が地に墜ちて、上流智識階級の一部には生活のたづきを失つたことなどから古今傳授などを生じたことや、その弊害の増して來た時、印刷術が盛になつて民間にも學術の研究が起つた結果、堂上派の學說を破壊しようとする運動が起つた。契沖や茂睡の説はそれであると説くが如きは第三法である。

古來御國の學問といへば和歌がその中心となつてゐた。いろいろの散文もこれに根ざして出來たことは芳賀博士の夙に論じられたことである。そのせいか歌に關する著書は古來少くない。寧樂朝から明治の昭代に至る間の歌學書は予が大日本歌書綜覽に

收めたものばかりでも千四百五十餘部に上つてゐる。その他に管見に觸れないものも多からう。けれども中世以降は傳統を重んずる結果、唯師説を録し若しくはこれに多少の補修を加へた類が多く、卓拔斬新の見を立てたものは極めて少い。本書は歌學の主なる思潮系統を基とし、古人の名著を擧げて、第一法を經とし第二第三法を緯とし、折衷して説を立てた。蓋し初學の研究には今日はまづこれが適當の方法と信じたからである。近世文學復興を劃する元祿時代を以て、上代歌學と近世歌學との二大期に分けて論ずる説もある。これにても宜しい。併し私は分けるなら荷田在滿が國歌八論を著した寛保の頃を以て境としたいやうな心持がする。これは和歌の目的に就いて古來の説を改めようとしたからである。それ以來眞淵・宣長・蘆庵・景樹等諸家の異なつた見方や學説が成立するに至つたからである。契沖や茂睡の功は大きいには違ないが、當流の説を斥破したといふ點だけでは上世と近世とを分けるのは如何なるものであらう。室町時代に於ても今川了俊の如きは和歌の秘傳を斥けてゐる。釋成俊はいふまで

もなく長慶天皇も定家の假名遣に就ては杜撰であることを夙く説かせられてゐる。又民間の學者や歌人の三輪執齋や荷田春滿の如きは戀歌を詠んではならないとしてゐるのに、却つて堂上家では三條西實教の如き、歌は戀歌が第一であるとの反對説を立てられてゐる。それゆゑ寛保を以て分けるのが無難であると思ふ。尤も物は成るの日に成るにあらずとの語もあり、又契沖及茂睡が學問の自由討究を唱道したといふ點からなれば敢へて異議はない。近世歌學の前派とか先驅として宜しい。さういふ考が頭にあつたものであるから、この書には別にさう時期も分けずに六十二章に述べて置いた。これは強ち先輩の説をもどくものではない。自分の著書の内容と考だけを述べておくのである。本書には比較的委しい年表を巻首に載せて、著名の歌人歌學者の著作や歿年などを擧げて置いた。尙一々の歌學書のごとは大日本歌書綜覽と照合されることを希望する。終に臨みて本書を出すに方つて種々と御厚意を忝うした先輩並に友人諸彦に對し、謹んで深厚なる謝意を表する。

附 言

この書の出版に就て尙一言を添へたいことがある。それは私がこの第一稿三巻を書きおろしたのは日本文法史を書いてから二年たない間のことであつた。當時恩師上田博士の一閱を願ふつもりで御手許に差出して置いた。固よりまだかた成りのもので汎く世間に問ふ志も無かつた。かかる間に月日はめぐり、四十三年の涼風の吹く頃になつて、竹柏園大人は日本歌學史を出版せられ、不肖にも一本を寄せられた。私は直に繙いて大に益を得たことも鮮くなかつた。但し自分の考の異なつてゐるところを書いて教を請うて見たい氣もしたが、疎懶の性は終に筆を着けるに及ばなかつた。爾來他事にかかづらつてゐて舊稿は捨てて顧みなかつた。ところがその後友人は頻に枯れた小さな六日の菖蒲を世に出せよ勸めて止まないで、又筆を執つて多少書き加へて見た。學習院にゐた頃同僚、紀平博士の御周旋によつて、某書肆から出版することになり、大正十二年の夏全部校正も終へ、八百餘頁の紙型も出來、今一週間も經たな

い中に御世話に預つた方々にも配本もしたり、坊間にも出すことになつてゐた。然るに九月一日のあの怖しい大震災火災はこれをも全く烏有に歸せしめて了まつた。當時芳賀博士はお眼のお悪いのに、輕井澤からわざわざ一文を草して送つて戴いたものである。今第三稿を出版するに方りこれを巻首に掲げるのは博士の御思召もいかがと思ふが、自分にとつては懐しい忘れがたい記念であるからである。自分はかの序文にもあるやうにこの年になるまでまだお父さまと呼ばれる仕合を持たない。このたび大日本歌書綜覽を出すに方り、不二書房のあるじがその姉妹篇として本書の刊行をそそのかされるので、二たび流産して三度目に生れた可愛い子供と思つて、自分はこれを世の中に送り出すのである。醜くても我子は美しと見えるとかいふことを聞いてゐるが、これもその壘に倣つたものである。

大正十五年七月

池袋大原なる小松園にて

著者しるす

年表

元明天皇御代

柿本人麿歿す。

同 和銅五年

大安萬侶古事記を撰ぶ。

同 六年

諸國に勅して風土記を撰進せしめらる。

元正天皇養老四年

日本書紀の撰成る。

聖武天皇御代

山部赤人歿す。

天平三年

大伴旅人歿す。

同 五年

山上憶良歿す。類聚歌林の撰者

光仁天皇寶龜三年

藤原濟成和歌式を作る。

桓武天皇延暦四年

大伴家持歿す。萬葉集の撰者。

嵯峨天皇弘仁十一年

空海の文筆眼心抄成る。これより先、文鏡秘府論を著す。

光孝天皇仁和中

喜撰式成る。

醍醐天皇昌泰三年

安部清行卒す。石見女式の作者

延喜五年

古今和歌集成る。

同十三年

亭子院歌合に判詞がある。

朱雀天皇承平元年

紀貫之新撰和歌集序成る。

村上天皇大曆五年

和歌所を置き、萬葉に點を加へさせられた。

同 康保二年

壬生忠岑歿す。和歌十體を作る。

三條天皇長和元年

選子内親王發心和歌集の序成る。

後一條天皇寬仁二年

源道濟歿す。和歌十體を作る。

後朱雀天皇長久二年

藤原公任薨す。新撰髓腦、和歌九品等の撰者。

後冷泉天皇天喜四年

始めて中殿御會を行はれた。

同 康平元年

能因歿す。歌枕及題抄の作者。

堀河天皇承德元年

源經信薨す。離後拾遺の作者。

同 康和元年

藤原通俊薨す。後拾遺問答の作者。

鳥羽天皇元永元年

六條家祖藤原顯季始めて人麿供養を行ふ。

同 年

藤原仲實卒す。綺語抄の著者。

保安元年

藤原敦隆卒す類聚古集の撰者。

大治元年

源俊賴金葉集を撰む。俊秘抄の著者。

近衛天皇康治中

藤原基俊歿す。悦目抄の撰者。

二條天皇永萬元年

藤原範兼卒す。和歌童蒙抄の著者。

六條天皇仁安元年

和歌現在書目録成る。

高倉天皇嘉應元年

藤原清輔和歌初學抄を著す。

治承元年

藤原清輔卒す。袋舛子、與儀抄、初學一字抄の作者。

安徳天皇壽永二年

顯昭の古今集序成る。同人の後拾遺抄註及散木集註成る。

同 三年

顯昭の柿本朝臣人麿勘文成る。

後鳥羽天皇文治元年

顯昭の古今集註完成。

同 年

西行御裳裾川歌合同宮川歌合成る。

建久元年

上覺、和歌色葉抄を著す。

同 四年

後京極良經家の六百番歌合。俊成の判に對し、顯昭陳狀を奉る。

同 八年

藤原俊成古來風體抄を著す。

土御門天皇正治二年 俊成正治奏狀を奉る。

建仁二年 千五百番歌合を行はれた。

元久元年 俊成歿す。萬時を著す。

建永元年 後京極攝政良經薨す。新古今集假名序の作者。

同 藤原隆房の四條大納言日記成る。

承元元年 藤原定家鎌倉右大臣の爲に和歌式を作る。一名を近代秀歌とも承元抄とも

いふ。

順德天皇建保四年 鴨長明寂す、無名抄螢玉集の著者。

年時不明 八雲御抄を欽撰せらる。

承久元年 藤原定家の毎月抄成る。

承久三年 定家の顯註密勘成る。

後堀河天皇貞應元年 藤原定家古今集の定本を作る。

同 同人の三代集之間事成る。

嘉祿二年 僻案抄成る。

貞永元年

藤原定家の長歌短歌古今相違之事成る。

四條天皇文曆二年

小倉山莊百首の事明月記に記す。

嘉禎三年

藤原家隆薨す。

延應元年

後鳥羽院崩御。和歌御口傳抄一卷。一名を遠鳥御抄ともいふ。

仁治二年

藤原定家薨す。詠歌大概秀歌之大略等の著作甚だ多い。

後深草天皇寶治二年

蓮性陳狀を奉る。

同

久我通光薨す。歌仙落書續歌仙落書の著者。

建長五年

仙覺の萬葉集奏覽狀成る。

同 六年

越部禪尼歿す。爲家に送る消息一通。

龜山天皇弘長元年

藤原爲家八雲口傳一名詠歌一體を著す。

文永六年

仙覺律師萬葉集註を著す。

後宇多天皇建治元年

藤原爲家薨す。萬葉佳詞、古今和歌集聞書、後撰集正義等の著者。

同 二年

眞觀寂す。綴川上の著者。

弘安元年

寂惠古今抄を著す。

大日本歌學史

同 六年

阿佛尼寂す。夜の鶴、庭の教の著がある。

伏見天皇永仁三年

野守鏡成る。

後二條天皇嘉元元年

定爲法印申文を奉る。

花園天皇延慶三年

爲兼爲世兩卿陳狀。

正和二年

爲兼玉葉集を撰む。

同 四年

歌苑運署事書成る。

後醍醐天皇正中元年

北畠親房の古今序註成る。

元弘二年

藤原爲兼歿す。和歌抄の著者。

延元二年

元盛勅撰和歌作者部類を作る。

同 三年

二條爲世薨す。嘉暦元年和歌庭訓抄を作る。

後村上天皇正平七年

津守國夏卒す。古今和歌集灌頂部を作る。

正平十一年（延文元年）

二條爲定和歌口傳を著す。

同

淨辨寂す。古今集序註を作る。

正平十八年（貞治二年）

愚問賢註成る。

正平廿一年（同 五年） 山阿の詞林采葉抄成る。

後龜山天皇建德元年（應安三年） 尊賢勅撰集作者異同考、古今讀人不知考を著す。

建德三年（應安五年） 冷泉爲秀薨す。ならの葉を著す。

天授元年（永和元年） 頓阿叔す。井蛙抄 桐火桶要指の著者。

同 年 南朝五百番歌合成る。

元中元年 朝山梵灯の歌道大概抄成る。

元中四年（嘉應元年） 二條良基近來風體抄を著す。

同 二年 二條良基薨す。筑波問答、知連抄、擊蒙句法等の著者。

後小松天皇應永十年 今川貞世和歌所不完條々成る。

同 十三年 今川貞世言塵抄成る。

同 了譽の古今集序註成る。

同 十五年 耕雲の一すぢめ一名耕雲口傳成る。

同 十六年 今川了俊の辨要抄成る。

稱光天皇應永廿二年 花山院長親七百番歌合序成る。

同廿四年 今川了俊の落書露顯成る。

同廿五年 正徹のなぐさめ草成る。

後花園天皇永享十年 菅原言長の旋頭歌類聚成る。

同 一條兼良歌林良材抄を著す。

文安二年 秀惠愚問賢註抄を作る。

同 五年 秀孝桂明抄を著す。

長祿二年 正徹寂す。正徹物語の著がある。

寛正二年 心敬のささめごと成る。

後土御門天皇應仁二年 心敬のひとりごと成る。

文明三年 宗祇の古今集兩度聞書成る。

同 東常縁宗祇に古今傳授をなす。

同 十年 宗祇詠歌大概抄を著す。

同十三年 一條禪閣薨す。梁塵愚按抄、和歌題林抄、さよのねさめ等の著がある。

延徳二年 飛鳥井雅親薨す。筆のまよひ、古今榮雅抄の著者。

明應二年 堯惠和歌秘抄を著す。

同 三年 東常絲殿す。十口抄、野州聞書東家三部秘録の著者。

同 四年 宗祇未來記雨中吟抄を作る。

同 八年 東素純假寝のす佐美を著す。

同 一 條冬良詠歌之大概抄を著す。

後柏原天皇文龜二年 宗祇寂す、愚問賢註抄及吾妻問答、分葉の著がある。

永正四年 堯惠の釣舟成る。

永正六年 飛鳥井雅康薨す。和歌功能、詠方初學を著す。

同 七年 猪苗代兼載歿す兼載雜談の著者。

同 十一年 一 條冬良薨す。建保寛正間歌詩會記を作る。

大永六年 牡丹華肖柏歿す。古今和歌傳書の著者。

後奈良天皇天文元年 三 條西實隆詠歌大概音義を著す。

同 六年 三 條西實隆薨す。詠歌大概抄、三内口訣、再昌草の著者。

同 十九年 尊鎮法親王薨す。愚問賢註聞書の著がある。

弘治三年 宗碩漢抄草を著す。

正親町天皇永祿二年 西洞院時秀卿和歌聞書成る。

同 六年 三條西公條薨す。詠歌大概註等を著す。

同 八年 堯惠の古今延五記成る。

元龜元年 佐々木信秀の初學和歌愚問抄成る。

同 姉小路家天仁波抄成る。

同 冷泉爲益薨す。和歌雜談を著す。

同 三年 細川幽齋三條西實枝より古今傳授を受く。

天正七年 山科言繼薨す。和歌題林抄の著者。

同 三條西實枝薨す。塚下抄の著者。

同十四年 宣義坊英酒の歌秘抄成る。

後陽成天皇同十八年 中院通勝玉屑抄を著す。

同十九年 木戸壽之の歌會作法聞書成る。

慶長五年 里村紹巴歿す。匠材抄、詠歌大概抄を著す。

同 六年 幽齋智仁親王に古今傳授をなす。

同 十六年 中院通勝薨す。岷江入楚、百人一首作者系の著者。

同 十六年 細川幽齋薨す、和歌受用集等の著者。

後水尾天皇元和三年 後陽成院崩す。名所方輿勝覽、詠歌大概御講釋、未來記、雨中吟抄等の御

作が有る。

同 今出川晴季薨す。和歌職原抄の著者。

同 里村昌琢の類字名所和歌集板行

寛永六年 智仁親王薨す。古今集聞書等の作がある。

明正天皇同十四年 本阿彌光悅歿す。歌仙大和抄を著す。

同 十五年 烏丸光庶薨す。耳袋記、面授口訣、公宴御會式の著者。

後光明天皇正保二年 源考巧の續勅選作者部類成る。

同 五年 隨葉集板行。

慶安元年 鱸重常の春雨抄板行。

同 二年 木下長嘯子歿す。

承應二年 松永徳貞歿す。歌林樸樸、戴恩記、貞徳筆記、堀河百首肝要抄の著者。

同 二年 中院通村歿す。未來記雨中吟註を著す。

後西院天皇明曆四年

圓城院實盛の和歌寶鑑抄成る。

同 新葉集作者部類成る。

萬治元年 後水尾院詠歌大概勅講成る。

同 二年 澄月の歌枕名寄板行。

同 三年 宗惠の松葉名所和歌集板行。

同 石川清民の檜山拾葉成る。

靈元天皇寛文五年 戸田茂暉誓書成る。

同 源泰季の詞林三知抄板行。

同 佐方宗佐幽齋翁問書を板行す。宗佐の著には和歌座右及かやくきがある。

同 六年 山本春正古今類句板行。

同 八年 河瀬菅雄の百人一首見聞抄成る。

同 九年 烏丸資慶歿す。資慶卿口傳、資慶卿詠方。

同 加藤磐齋の三部抄増註板行。

同 十年 下河邊長流の枕詞燭明抄板行。

同 十一年 西順の歌林名所考板行。

延寶元年 和歌吳竹集板行。

同 歌道秘藏錄板行。

延寶五年 下河邊長流續歌林良材集を板行す。

同 石出吉深凡右抄板行。

同 七年 飛鳥井雅章薨す。飛鳥井家の式を著す。

同 八年 岡西惟中の續無名抄成る。

同 後水尾院崩御。類題寄書、一字御抄、詠歌大概御抄、玉露稿、和歌作法、

御情願聞書、可秘抄の御著作がある。

同 九年 望月長孝歿す。詠歌大本、詠歌大概講談密註、古今仰戀を著す。

延寶中 潮音大成經偽作事件により遠島に處せられた。

天和二年 尊俊の和歌作法條々板行。

同 歌合部類板行。

同 三年 觀阿居士の二十一代集後談成る。

貞享二年 名所小鑑板行。

同 三年 下河邊長流歿す。萬葉管見抄、四季出題抄、神佛二聖和歌註等の著者。

同 三年 有賀長伯の和歌世々の彙成る。

同 四年 日野弘資歿す。野江問答、詞林問答、日野弘資口義等門人の筆記が存す。

同 契沖の詞草正採抄成る。

同 山崎平右衛門茂睡の説を聞いて歌學密受抄を録す。

東山天皇元祿元年 河瀬菅雄の和歌拾題板行。

同 鈴木重矩烏丸光雄の説を録し未底記を作る。

同 二年 契沖の萬葉代匠記成る。

同 淵出自勝軒の名所和歌探本求源抄板行。

同 烏丸光雄歿す。光雄卿口授。續耳袋記、門人によつて記さる。

同 和歌威徳物語成る。

同 三年

契沖の勝地吐懷編成る。

同

後水尾院一字御抄刊。

眞名艸板行。袖珍歌枕板行。

元祿三年

細川行孝卒す。續耳袋記の作あり。

同 四年

契沖百人一首改觀抄成る。

同 五年

巨勢卓幹周詩准擬和歌を選び。

同

戸田茂睡百人一首雜談を著す。

同

岡西惟中歿す。消閑雜記を著す。

同

中堀僖庵の荻のしをり成る。

同

貝原益軒の和歌紀聞抄成る。

同 九年

有賀長伯の初學和歌式及歌林雜木抄板行。

同 十年

有賀長伯の濱の眞砂板行。

同

契沖類字名所補翼抄を著す。

同

戸田茂睡僻言調を著す。

同十一年 有賀長伯の和歌分類板行。

同 戸田茂睡の梨本集成。

同 野田忠肅の萬葉五句類句、及萬葉類礎成る。

同十三年 有賀長伯の和歌八重垣、和歌二葉草板行。

同十四年 三條西實教薨す。實教卿歌話。

同十五年 契沖寂す。古今餘材抄、河社、新勅撰評、六帖考證拾遺の著者。

同 中院通茂の未來記抄及勸染集成。

同 北村季吟幕府に聘せられ、和歌所法印となる。

同 惠藤一雄和歌古語深秘抄を板行す。

寶永元年 作暢の歌林備考成る。

同 稻葉正倚の知海抄成る。

同 平間長雅の百人一首講談秘註成る。

同二年 素兄堂止靜の和歌千年友板行。

同二年 北村季吟歿す、増補和歌題林抄、和歌詞の抄、萬葉拾穂抄、八代集抄、歌

仙句集拾穂抄等の著者。

同 三年

戸田茂睡歿す。

同

歌道まさきの葛板行。

同 五年

阪光淳の和歌禁忌遠慮之辨或る。

同 五年

稻葉正倚の席話抄成る。

同

歌林草分衣板行。

同 六年

世外子の和歌組題集板行。

同

和歌玉かづら板行。

同

清水谷實業薨す。口傳一卷。

中御門天皇同七年

同

中院通茂薨す。溪雲問答、詠歌大概聞書、類葉和歌溪雲抄の著者。
平間長雅歿す。和歌三義、和歌血脈道統譜、風塵記の著者。

同

跡部光海の和歌三神傳成る。

正徳元年

松井幸隆愚問賢註六窓鈔及幸隆問書を著す。

同

度會常彰六窓塵談を録す。

同 三年 歌道名目抄板行。

同 瑞立齋の和歌詠格追考板行。

享保四年 有賀長伯の秋の寐覺板行。

同 五年 和歌伊勢海上板。

同 野村尙房三玉桃事抄成る。後享保八年板行。

同 七年 柘植知清の濱木棉成る。又かたいとの著をなす。

同 九年 香川宣阿の草庵集蒙求諺解成る。

同 十一年 素兄堂の和歌藻英小傳板行。

同 十二年 阪靜山和歌用心記を著す。

同 十五年 阪靜山和歌格式を著す。

同 十六年 靈元法皇の作例初學考成る。

同 久志本常彰の藝林珠璣成る。

同 十八年 青木鷺水歿す。和歌淺香山を著す。

同 二十年 姉小路實紀の竹亭和歌式成る。

同 香川宣阿歿す、和歌傳書がある。

同二十一年 阪靜山の拾題辨知抄、諷詠覺悟抄成る。

櫻町天皇三文元年 荷田春滿歿す同假雲の詞林拾葉成る。

同二年 加藤枝直の歌の姿古今を論ふ詞成る。

同 仁木充長歿す。二條家口傳あり。

同 烏丸光榮の内裏進上の卷成る。

同 桃原堯民幽齋問書講習辨を著す

同三年 武者小路實陰歿す。初學考鑑を著す。超嶽院御講演の記(門人録す。)

同年 依田貞鎮の詠學辨要成る。

寛保元年 荷田春滿の國歌八論成る。

同 田安宗武國歌八論餘言を著す。

同 在滿の國歌八論再論成る。

同二年 荷田在滿の古今左註論成る。

同 賀茂真淵國歌八論餘言拾遺、國歌臆説を著す。

延享元年

眞淵の再奉答書成る。

同

赤井一貞管見問答を著す。

同 三年

田安宗武の歌體約言成る。眞淵これが跋を作る。

同

岨山春幸の歌仙二葉考板行。

同

河瀬管雄の名所草木考成る。

同 四年

太宰春台歿す。獨語を著す。

同

久米五郎兵衛のまさきのかづら成る。

寛延元年

度會常彰の日本國風成る。

同

烏丸光榮歿す。詠歌覺悟教訓を著す。

同 二年

栗山滿光の和歌道しるべ成る。

同

眞淵の萬葉解通釋成る。

同

多田義俊歿す。桂樹歌話、桂花鈔、風耳抄を著す。

同

田澤義章の歌仙考成る。

寶曆元年

松山圓應の和歌叢林夜話成る。

同 荷田在滿歿す。

同 七年 賀茂眞淵の冠辭考成る。

同 紀安資和歌要領を著す。

同 十年 眞淵の萬葉大考成る、龍の公への答成る。

野呂玄文の佛足跡歌考成る。

小野好純の歌道根原鈔成る。和歌手引の糸を著す。

同 有栖川職仁親王の愚考一步抄成る。

同 十一年 大菅公圭國歌八論斥非を著す。

同 十三年 本居宣長石上私淑言を著す。同紫文要領成る。

同 建部綾足片歌二夜問答を著す。

明和元年 眞淵の歌意考及古今集序表考成る。

同 二年 眞淵の新まなび成る。宇比麻奈備成る。

同 建部綾足歌文要語を著す。

同 松宮觀山の和學論成る。

同 加藤枝直の觀山に答ふる書成る。

同 三年 建部綾足はしがきぶりを板行す。

同 四年 富士谷成章のかざし抄板行。

同 五年 栗本太麿夷曲庭訓抄を著す。

同 柏崎具元の和歌出題考成る。

同 六年 村上織部の古今集助辭分類板行。

同 賀茂眞淵歿す。

同 七年 樹取魚彦の續冠辭考成る。

同 有栖川宮織仁親王の詠歌論成る。

後桃園天皇同八年

源通雄の見勅選脱家集歌成る。

遠藤胤忠卒す。當家歌道教訓二十五條等の著あり。

同 九年 建部綾足の詞草小苑成る。

餘裕の和歌作法板行。

安永二年 深澤薫の類聚冠辭略解成る。

同 建部綾足のはしがきぶり後篇板。

同 加藤景範の名所ついまつ板行。

同 三年 冷泉爲村斃す。樵夫問答。市の口すさび、和歌出似葉要解を著す。

同 七年 日野資枝の詠歌一體備忘録成る。

同 八年 富士谷成章歿す。六運圖略、七體七百首、あゆび抄、五級三差、大海の原の著者。

同 本居宣長の玉の小櫛及詞の玉緒成る。

同 六年 詠歌金玉論成る。

同 九年 和歌詞德抄板行。

同 座光寺尹祥の和歌詞譜成る。

同 歌道人物誌再板。

天明二年 日野資枝の歌合日録校訂成る。

同 度會常彰の和歌玉柏板行。

同 寂明の歌道根元問答板行。

同 尾崎雅嘉のぬさぶくろ板行。

同 青木菅根の葦垣成る。

同 小澤蘆庵の難藏山集成る。

同 中臣山伎麿の六義考及國史古集成る。

同 三年 入江昌熹の異名分類抄板行。

同 森長見の國學忘具成る。

同 久川靱負の和歌職原抄捷徑上板。

同 四年 萩原宗固歿す。一葉抄、萩原隨筆、萩原割記を著す。

同 四年 入江昌熹の久保之取蛇尾板行。

同 六年 富士谷御杖の百人一首燈成る。

同 しのば草板行。

同 七年 松平康定の八重疊成る。

寛政元年 加藤景範の和歌虛詞考板行。

同 二年 小澤蘆庵の塵ひぢ及蘆かび成る。

同 四年

富士谷成壽の詞葉新雅板行。

同

本居宣長の國歌八論同斥非評成る。同人の玉霰板行。

同

宮部義正歿す。澄覺聞書、詠歌覺悟等の著作がある。

同

新和歌政名草板行

同

小澤蘆庵の玉霰雜詞成る。

寛政五年

眞幸千蔭の歌問答及宣長の評成る。

同

服部高保歿す。讀冠辭考を著す。

同

富士谷御杖歌袋を刊行す。

同

澄月の和歌爲隣抄板行。

同

御杖和歌梯を板行す。

同

小澤蘆庵の六義考成る。宣長の玉勝間成る。

同

中原廣道の和歌感應抄成る。

同

柳原均光の詩歌講師部類成る。

同

海量の愚種成る。

同 尾崎雅嘉の和歌明題部類正續共に板行。

同 富士谷御杖の歌道非唯抄板行。

同 六年 同人の吟南乃夷則成る。

同 同人の和歌入紐成る。

同 八年 加藤景範歿す。国歌管窺、みなれさを、濱つとの著がある。

同 小澤蘆庵の振分鬘板行。

同 深澤薫の國風發蒙成る。

同 尾崎雅嘉の掌中和歌題林抄、掌中和歌明題抄、ぬさぶくろ板行。

同 十年 源義亮の石上板行。

本居宣長の初山踏成る。

加藤景範のみやびごとと玉かづら板行。

同 十一年 長野三晴の萬葉集類句板行。

同 度會常夏の六義口訣成る。

同 祖能和歌難波津を板行す。

荒木田久老の日本紀歌の解成る。

同 村田春海本居太平と歌を論ず。

同十二年 石野廣道歿す。蹄溪隨筆、大澤隨筆、泉石抄等の著者。

同 小澤蘆庵のふるの中道板行。

同 同人のふりわけ髪自註成る。

同 飛鳥井雅成の於歌道成業譜代頗相違の事成る。

同 伴蒿蹊の國歌或問成る。

享和元年 萩原元克の詠歌古道道の指折板行。

同 本店宣長及小澤蘆庵歿す。

同 荒木田久老の信濃漫録成る。

同 尾崎雅嘉の群書一覽成る。

同 小國重年の長歌珠衣成る。

同 似雲の磯の波板行。

同 伴資矩の和歌題辭要解成る。

同 二年 小川布淑の雅俗辨成る。

同 佐々木眞足の東さとし成る。

同 海量の續尚葉異本考成る。

同 慈延の隣女晤言板行。

同 宣長の詞の東鑑板行。

同 三年 伴蒿蹊の讀雅俗辨成る。

同 春海の雪岡禪師に與ふる書成る。

同 昇道の雅俗再辨成る。

同 春海の家集辨成る。

同 藤井高尙の佐喜草成る。

文化元年 上田秋成の金砂及金砂剩言成る。

同 横井千秋歿す。詩歌論を著す。

同 岡崎俊平百千鳥板行。

同 伴蒿蹊の門田の早苗刊行。

同 和泉真國の橘平歌評成る。

文化二年 香川景樹養家を去りて一家の説を立つ。

同 慈延寂。二十一代集概覽の著がある。

同 三年 賀茂季鷹の萬葉類句成る。伴資規の歌辭要解板行。

同 度會常夏の詠歌一體密註成る。

同 四年 大塚寛柔の和歌假名題板行。

同 五年 加藤千隆歿す。萬葉略解等の著者。

同 田山敬儀のたま苗板行。

同 清水濱臣の朝敵辨成る。

同 同人の泊泊筆話成る。

同 平岡敏道の歌學古今論成る。

同 六年 橋本魚彦歿す。難うけらが花、萬葉梯の著者。

同 深澤薫歿す。二紀國詩註、萬葉摘芳を著す。

同 七年 小林歌城の萬葉長歌類句成る。

齊藤彦麿の竹帚成る。

村松眞船のゆきのふる道成る。

同 八年 村田春海歿す。歌談、歌苑古題類抄、ささぐり、織錦舎隨筆を著す。

同 清水濱臣の賢歌愚評成る。

同 石塚龍麿歌談斥非を著す。

同 金谷興詩近藤光輔に答ふる書成る。

同 平田篤胤の歌道大意成る。

同 香川景樹の新學異見を著す。

文化九年 高田與清の俳諧歌論板行。

同 内山眞龍の日本紀類聚解成る。

同 十年 西村千穎の詠歌雜體抄板行。

同 成島司直の序頭書要語歌板行。

同 十一年 齋藤彦麿の詠歌大概止解成る。

同 村上影而の古今集序本の心成る。

同

足代弘訓の記紀萬葉總類語抄成る。

同十二年

芝山持豊薨す。やまと歌の式を著す。

同

香川景樹の百首異見成る。

同

富士谷御杖神樂催馬樂燈大旨成る。

同

畠田尙之の歌學集腋成る。

同

中島廣足の三木三烏辨成る。

同十三年

富士谷御杖の北邊隨筆成る。

同

高田與清の仙覺字類、及竟管家字類成る。

同十四年

本間素當の新學考鑑成る。

同

中島廣足のうなるのすさび成る。

同

石津亮澄の新撰はしがきふり板行。

同

富士谷御杖の誦道學要成る。

文政元年

橘守部の萬葉摘翠抄成る。

同

林圀雄の興歌考。

同 二年 橘守部の短歌撰格及長歌撰格成る。

同 本居春庭の道のさきくさ成る。

高田與清の樂聲類語抄板行。

同 淺草庵の清話抄板行。

同 香川景樹の萬葉拮解成る。

同 業合大枝の新學異見辨成る。

同 齋藤彦麿の童謠廢僻論成る。

同 中臣親滿の千鳥の跡板行。

同 木下幸文のさやさや草紙成る。

同 中島廣足の後の歌がたり成る。

同 四年 賀茂直兄の言のただち成る。

同 内山眞龍歿す。古事記謡歌註を著す。

同 兒山紀成の遠山彦成る。

同 富士谷御杖の神明憑談成る。

同人の萬葉燈板行。

同 五年 清水濱臣の據宇造抄成る。

同 和田嚴足の加難陳百番擬歌合成る。

同 小林斐成の古の中道辨成る。

同 鹿持雅澄の萬葉枕詞解成る。

同 六年 石塚龍鷹歿す。眞葛葉、假名遣奥の細道を著す。

同 富士谷御杖歿す。北邊髓腦、眞言辨等の著作が多い。

同 荒木田久守の松のふる枝成る。

同 七年 清水濱臣歿す。語林類葉、人名歌抄、歌辭要解糾繆、歌林雜木抄増補等がある。

同 松平康定の木綿襪成る。

同 城戸千楯の和歌布留の山路成る。

同 八年 和歌革運略圖板行。

文政八年 吉田令世の聲文私言成る。

同 九年 岡本保孝の六帖類句成る。

同 藤井高尙の三つのしるべ成る。

同 高田與清の歌詞考成る。

同 十年 本居大平の神樂歌新釋成る。

同 十一年 山平伴鹿の新學異見辨成る。

同 濱田孝國の獨語辨成る。

同 安達盈の冠辭考略成る。

同 十二年 岡部春平の堅室目錄成る。

同 十三年 宮下正岑の桂の曲枝成る。

同 信田稻麿の桂園雜歌撰成る。

同 座山太の同書評成る。

同 八田知紀の筆のさが評成る。

天保元年 秋山光彪の桂園一枝評成る。

同 二年 並河基廣の通俗辨成る。

- 同 三年 香川景樹の古今集正義總論成る。
- 同 本間保之の眞直號板行。
- 同 四年 中川自休の大ぬさ成る。
- 同 橘守部の萬代集緊要、夫木緊要成る。
- 同 五年 野々口隆正の歌日記上板。
- 同 橘守部の神樂催馬樂入綾成る。
- 同 六年 田中芳樹の古風三體考成る。
- 同 八田知紀の千代の古道成る。
- 同 黒川春村の燒錄成る。
- 同 七年 相川功垂のぬさのよるせ成る。
- 天保七年 橘守部の心の種成る。
- 同 野々口隆正の言の正道成る。板行。
- 同 宮下正岑の歌學卞和玉成る。
- 同 八年 丹羽氏暉の大ぬさ辨成る。

同 鹿持雅澄の永言格成る。

天保十年 穂井田忠友の三體考跋文成る。

同 九年 西田直養の萬葉長歌格成る。

千家尊孫の比那能歌語板行。

同 間宮永好の長歌分類成る。

同 十年 松下誠明の和歌名所秋の寢覺板行。

同 五十嵐篤好の歌學初訓次訓成る。

同 十一年 橘守部の長歌大意成る。

同 岡部東平の歌體緊要考成る。

同 萩原廣道の百首異見摘評成る。

同 關政方の譬調篇成る。

同 十二年 橘守部の萬葉緊板要行。

同 五十嵐篤好の歌學三訓成る。

同 鹿持雅澄の勝地佳境成る。

同 同人の古今集序存疑成る。序文體要成る。

同 橘守部の萬葉千別總論成る。

同十三年 近藤芳樹の寄居歌談成る。

同 黒川春村の集外歌仙考十代成る。

同十四年 花垣幸國のあはれの種板行。

同 内山眞弓歌學提要を出す。又同人のみさびえ成る。

同 香川景樹歿す。

同 熊谷直好の古今集正義總論補註成る。

同 岸本山豆流の二六類句成る。

同十五年 深田正韶の芝山持豊脚聞書成る。

弘化元年 橘守部の虚字詠格成る。

同 井上文雄等の市のとよみ成る。

同 吉田令世の歴代和歌勅選考成る。

同二年 八田知紀の古今集正義總論補註論成る。

同 長野義言の謠の大武根板行。

同 三年 鈴木重胤の古今和歌初學成る。

同 伴信友歿す。

同 高橋殘夢の石上枕詞例、三代枕詞例成る。

同 四年 長澤伴雄類頌和歌作例集を撰む。

同 水野忠央丹鶴叢書を板行し始む。

同 深田正韶の詠格聲調極秘の傳成る。

同 橘守部の稜威言別成る。

同 小山田與清歿す。松屋叢書、作歌故實を著す。

嘉永元年 草鹿砥宣隆旋頭歌四體を著す。

同 萩原廣道の詠歌心の種及葉山の槲板行。

同 二年 伴林光平の稻木抄成る。

同 草鹿砥宣隆の旋頭歌抄成る。

同 中村知至の長歌規則成る。

飯塚久敏のさしもぐさ成る。

同 三年 本間游清歿す。蜘蛛のふるまひ、四方硯砂、耳敏川の著者。

同 伴林光平の垣内七草板行。

同 四年 半井梧庵の歌格類選成る。

同 中島廣正の榎のしづ枝成る。

同 六人部是香の古今假名序及眞名序論並に古今集歌輯考成る。

同 伊庭秀賢の詠歌入學抄成る。

同 桐園宗草の桐の落葉板行。

同 草鹿砥實隆の天門抄成る。

同 六年 小林歌城の桂園一枝拾遺譜成る。

同 源定俊の山口歌談成る。

同 臼井治堅歿す、遺稿あり。

同 七年 前田利保の歌道天地解成る。

同 千家尊澄の歌林考成る。

同 七年 山田常典の千木の片そぎ成る。

安政元年 井上文雄の伊勢の家苞初篇成る。

同 八田知紀の敷島考成る。

同 二年 本居内遷歿す。古調考等の著者。

同 石橋眞國の大ぬさ評成る。

同 三年 足代弘調歿す。旋頭歌類聚、歌體雜載、歌辭類聚を著す。

同 前田利保の古今集大論、古今和歌集夜話成る。

同 四年 野々口隆正の六句歌體辨成る。

同 五十嵐篤好の湯津瓜櫛板行。

同 加納諸平歿す。柿園歌話を著す。

同 前田利保の山彦傳成る。同活用雅俗風調辨及時運の差異成る。

同 五年 同人の近隣、園の拾草、國頌専門、國頌専門嘉々成る。

同 西原魁樹のうたがたり成る。

同 鹿持雅澄歿す。萬葉古義を著す。

同 六年

前田利保卒す。

同

黒澤翁滿歿す、獨學綱を著す。

同

堀秀成の朝ねがみ成る。

同

熊谷直好の梁塵後抄成る。

同

伴林光平の國の池水成る。

同

上田千風の進國歌説上木。

萬延元年

飯塚久敏の玉帚成る。

同

鈴木重胤の詞の塵芥成る。

文久元年

中島廣足の倭歌諸説成る。

同

六人部是香の長歌玉琴成る。

同

天野政徳歿す、古學家傳稿あり。

同 二年

井上文雄の伊勢家苞第二篇板行。

堀秀成の濱の千鳥成る。

五十嵐篤好の津湯爪樹上木。

元治元年 物集高世の歌學新論成る。

同 萩原廣道のさよしぐれ成る。

同 吉川忠行歿す。作例類語の著者。

慶應元年 西田直養歿す。篠屋漫筆の著者。

同 木村正辭の萬葉集書目提要成る。

同 堀秀成梅の木かげの文成る。

同 香川景恒歿す。景賢問答の著者。

同 二年 井上淑蔭の歌格新話成る。

同 三年 井上淑蔭の歌格諺話成る。

同 鈴木雅之の歌言正言成る。

同 鈴木重嶺の憶魯何應斐成る。

明治元年 大隈言道歿す。ひとりごち及こぞのちりを著す。

同 橘曙覽歿す。

同 小川弘の古歌韻解成る。

- 同 二年 宮中に歌道御用掛を置かる。
- 同 五年 橋本直香の旋頭歌解成る。
- 同 稻垣琴也の言擧成る。
- 同 六年 相川景兒の百異拾解成る。
- 同 八田知紀歿す。
- 同 八年 鈴木重嶺の琴閣歌論成る。
- 同 同人の國歌風調論成る。
- 同 九年 伊達千廣の和歌禪話成る。
- 同 十年 堀秀成の櫛の板屋成る。
- 同 十一年 堀秀成の伊勢家苞辨成る。
- 同 岡本保孝の難波江成る。
- 同 十二年 上田及淵の歌學裁拾衣刊行。
- 村上守雄の神風の伊勢の海成る。翌年刊。
- 同 十四年 權田直助の長歌學柱成る。

大日本歌學史

同 佐々木弘綱の開化新題和歌梯刊。

同 渡忠秋歿す。かた糸の著あり。

同十五年 外山正一、矢田部良吉、井上哲次部新體詩を始め新體詩鈔を出す。

同十六年 高崎正風の進講筆記成る。

同十七年 飯田年平の石園歌話成る。

同 平井言滿東京大家十四家集を撰ぶ。

同 海上胤平十四家評論を出版す。

同十八年 鈴木弘恭十四家評論辨を出す。

同 御巫清直の十四家集評論再辨成る。

同十九年 石橋忍月の日本詩の連聲（早稻田文學）

同二十年 小中村義象等國學和歌改良論出版。

同 武津八千穂國學和歌改良不可論を出す。

同廿一年 西村正三郎歌謡教育論出版。

同 佐々木弘綱長歌改良論を出す。

- 同 海上胤平長歌改良論辯駁成る。
- 同 宮内省に御歌所を置く。
- 同 森田思軒の「和歌ヲ論ズ」掲載。(國民之友)
- 同 高須葛根の歌格分類抄成る。
- 同 佐々木信綱歌の葉出版。
- 同 渡邊眞楨の古代歌格成る。
- 同 元良勇次郎のリズムと文學(哲學會雜誌)
- 同 十月より翌年へかけて山田美妙の日本韻文論出づ。(國民之友)
- 同 大西操山の詩歌論一斑(日本評論)
- 同 K、U氏の詩辨(國民之友)
- 同 坪内逍遙の新體詩に就きて(同交會雜誌)
- 同 廿四年 落合直文の新撰歌典出版。
- 同 中村秋香の新撰歌がたり出版。
- 同 笹村良昌の和歌作法指南出版。

大日本歌學史

同 廿五年 落合直文淺香社を組織す。

同 間島冬道の歌話成る。

同 池袋清風の古代和歌史（國民之友）

同 池袋清風の古代勅選和歌批評（國民之友）

同 芳賀矢一の日本韻文の形體に就きて（哲學會雜誌）

同 大西操山の詩歌論（青年文學）

同 旗野櫻坪の俗歌韻話（早稻田文學）

同 旗野櫻坪の無韻非歌論（早稻田文學）

同 廿六年 大和田建樹の新體詩學出版。

同 河添樵霞の韻文組立法出版。

同 石戸谷昌進の國歌論評釋成る。

同 海上胤平の歌學會歌範評論成る。

同 春日敬之の大八洲學會詠歌邪正論出づ。

同 平悖の歌論類纂出版。

- 同 井上哲次郎の詩歌改良の方針（國民之友）
- 同 大西操山の國詩の形式に就きて（早稻田文學）
- 同 廿八年 外山、山散文詩を唱道す。
- 同 林斧太の我國將來の詩形と外山博士の新體詩（帝國文學）
- 同 廿九年 外山、山新體詩及朗讀法（帝國文學）
- 同 近藤清石の歌の正格變格諸體の論（國學院雜誌）
- 同 三十年 心の花發刊。
- 同 末松謙澄讀賣紙上にて與謝野寛と歌を論ず。
- 同 末松謙澄の國歌新論出版。
- 同 佐々木信綱日本歌學全書を出版し始む。
- 同 正岡子規の歌人に與ふる書（日本新聞）
- 同 中村秋香の新體詩歌自在出版。
- 同 三十一年 高橋龍雄の五七調の七五調に變じたる理由（國學院雜誌）
- 同 三十二年 同（同上）

同 いかづち會の本領（心の花）

久保猪之吉の國風懇談會席上演説（心の花）

與謝野鐵幹の國詩革新の歴史（心の花）

上田萬年の短歌の將來（人民）

同三十二年 武島羽衣の新撰詠歌法出版。

同 江刺恒久の今様考出版。

同 佐々醒雪の謠物の變遷（帝國文學）

同三十三年 新詩社の明星初號發刊。

神谷保朗の旋頭歌辨（國文學）

樋口秀雄の短歌の詩的價値を論ず（帝國文學）

木村正辭の萬葉集古義存疑（國學院雜誌）

同 石橋愛太郎の新體詩指南出版。

同 木下子之吉の三代集中の掛詞（帝國文學）

同三十四年 三瓶浩齋の詠草のかきかた出版。

同 呼柳都太郎の詩文界の病理を論ず（帝國文學）

同三十五年 金子薰園の歌がたり出版。

同 松浦詮懷紙書式板行。

同 正岡子規逝く。

同 韻文朗讀會を神田青年會館に開く。

同 岩野泡鳴の詩句格調管見明星に載る。

同三十六年 松下大三郎等の國歌大觀出版。

同 落合直文歿す。

同 大日本歌道獎勵會設立さる。

同 上村才六新派和歌評論を出版す。

同 黒山清綱歌徳記を出版す。

同 海上胤平の自讃歌評論出版。

同 前田林外、岩野泡鳴、相馬御風純文社を組織し百合を發行す。

同 大阪朝日新聞社懸賞にて大阪市歌を募る。

同 萬朝報處世の歌を募る。

同三十七年 讀賣新聞社大日本膨脹の歌を募る。

同 愛天懸賞當選新體詩を評す。(帝國文學)

同 上田敏の新體詩管見(心の花)

同 芳賀矢一の詠史の歌(帝國文學)

同 筒井源次郎の俗謠の發達(國學院雜誌)

同 小杉樞邸の歌會の式場及古今の沿革(心の花)

同 木村正辭の萬葉反歌考(心の花)

同 品田太吉の歌合起原考(心の花)

同 坪内逍遙の新樂劇論出版。

同三十八年 春風道人の現代の新體詩に就て(日々新聞)

同 角田浩々の比興詩を論じて現代の詩風に及ぶ(讀賣新聞)

同 櫻井天壇の歌壇漫言(帝國文學)

同 吉川豐吉の聲樂を藉る詩形と新樂式(帝國文學)

- 同 春風道人の現時の和歌及其作家（東京日々）
- 同 吉丸一晶の歌樂雜載（東京日々）
- 正宗敦夫の聲喩法（中國民報）
- 同三十九年 西村時彥等の今古歌話出版。
- 同 岩野泡鳴の半獸主義出版。
- 同 志田義秀の日本民謡概論（帝國文學）
- 同 中央公論は現代に於ける新體詩の價值につき諸家の意見を徴す。
- 同 幸田露伴の短詩につきて（心の花）
- 同 彌富彌雄の景樹の自信力と慣用的修辭（心の花）
- 同 鴻巣盛廣の旋頭歌を論ず（心の花）
- 同四十年 中村秋香の歌がたり出版。
- 同 角田浩々の鷗心録出版。
- 同 鴻巣盛廣の歌題の季節に就て（心の花）
- 明治四十年 岩野泡鳴新體詩の作法出版。

大日本歌學史

同四十一年 河井醉茗の新體詩作法出版。

同 佐々木信綱歌學論叢出版。

同 中根淑の歌謡字數考出版。

同 口語詩問題起る。

同四十二年 雜誌スバル發刊。

同 窪田空穂の短歌作法出づ。

同 神谷保朗の帝國歌學史出版。

同 吉野臥城の新體詩研究出版。

同 正宗敦夫岡山に歌文珍書保存會を起す。

同四十三年 太陽臨時増刊明治文學史出づ。

同 佐々木信綱の日本歌學史出版。

同 内藤濯の自由詩の限界（帝國文學）

同 室松岩雄歌學文庫の發行を企つ。

同四十四年 高崎正風歿す。

同四十五年

遠山稻子高崎正風の歌ものがたりを出す。

鈴木虎雄の格調神韻性靈の三詩説（藝文）

同

近重眞澄の新體詩の押韻法に就きて（藝文）

同

岩野泡鳴の近重博士の押韻法の批評（藝文）

同

金子薫園の歌文新話出版。

年表終

大日本歌學史目次

第一、歌學の範圍と其の起原	一
和歌と歌學—歌學の範圍—歌學史の本領—和歌の分類	
第二、和歌式と漢詩の法格	五
支那の制度文物の模倣—六朝及初唐の詩格類の輸入—和歌現在書目錄—和歌式の生まれた所以—和歌四式—演成式—歌體三種—查體七種—雅體十種—七病—喜撰式—四病—諸詠八階—詠物異名—孫姬式—八病—石見女式	
第三、紀貫之の歌論	一五
國民の目覺め—古今集の序—歌とは何ぞや—ひとの心とひとつ心—歌を主觀的のものとして考へた—詩の大序と古今の序—和歌の功用—歌の起原及發達—歌體六種—部立—六歌仙評—花實相兼—歌を教化の具として考へてゐた	
第四、歌合の判に見えたる歌學思想	二〇

歌合—判詞—想以下九則—歌合と天台の論議

第五、藤原公任の歌學附道濟と能因……………二五

會根好忠—四條大納言公任—新撰髓腦—歌の標準—詠歌法—和歌九品—深窓秘抄—八雲御抄の公任評—道濟と十體—能因—歌枕—秘藏抄

第六、六條源家……………三一

經信と母の感化—難後拾遺抄—非難の條項—經信の歌に對する考—後拾遺問答—六條源家の系圖—俊賴の略傳—良玉集—俊賴口傳—歌體を十種に分つ—折句沓冠回文—性質上の分類—心と節と詞—題詠の心得—似せ物—莫傳抄—俊賴と基俊との關係—隆源口傳—歌苑抄

第七、藤原基俊及其の前後の歌學……………三八

基俊の略傳—悅目抄—悅目抄と他書との關係—俊秘抄との類似—日吉歌合の判詞との關係—十訓抄との關係—八雲御抄との關係—篋の川上との關係—烏丸本悅目抄—中宮亮顯輔家の歌合の判—西宮歌合判—關白内大臣家歌合判—無名抄の基俊に關する說—和歌無底抄—和歌無底抄考—萬葉訓點の研究—萬葉抄と類聚古集—古葉略類聚抄—集の目錄は一種の歌人傳—綺語抄—五髓腦

—和歌童蒙抄—歌合例

第八、六條藤家の歌學……………四七

人麿供養—六條家の系圖—後葉集と牧笛記—白河尙齒會—奥儀抄—長短歌に對する諸説—混本歌—俳諧歌の解説—初學抄—由緒詞—よせ詞—秀句—似物—喻來る物—初學一字抄—袋舂子—和歌會式作法—撰集の故實—歌壇の逸話—創作時の態度—袖中抄—古今序註—萬葉集時代難事—人麿勘文—六百番陳狀—若宮社歌合判—獨鈷錄首の評—顯註密勘—連性陳狀—色葉集—詠作旨趣—菴磨宗を戒む—歌姿三等—名譽歌人の略傳—一種の和歌辭典

第九、御子左家の歌學 その一 俊成附西行……………六二

俊成の略傳—更闕けて後物しめやかに—幽玄調の代表者—民部卿家歌合跋—萱齋院の爲に古來風體抄を著す—和歌は佛道の所緣—和歌の史的記述の濫觴—病犯に關する意見—六條家と軋る—玉津島明神を勸請す—和歌肝要—西公談抄

第十、歌林苑一派の歌學……………六八

堅紋浮紋の喻—白は他の色に優る—名所を取る故實—半臂句—歌は幼かれ—

鴨長明の無明抄―近體古體―歌を享樂のものと見る―幽玄體の解釋―古歌を
取る法―警玉集―文字錄

第十一、雲上の歌學……………七四

聖上自ら判者に―三體和歌―後鳥羽院抄―近世歌人の御批評―水無瀬玉藻―
八雲御抄―正義部―相歡―連歌の法則―作法部―枝葉部―言語部―名所部―
用意部―歌の鑑賞―近世歌人の弊竇―剽竊―秀句を警む―詞のいりほが―風
情の入ほが―にくいげ―破邪と顯正―風情を先とする―心を先とする―詞を
先とする―本歌取り―てにをは―推敲―歌人の月旦―三部書

第十二、御子左家の歌學 その二 定家附家隆……………八六

定家を難ぜんものは冥加あるべからず―定家と家隆―その著作―詠歌大概―
詠歌の信條―詠歌大概の註釋三十種―秀歌之體大略―正風體抄―家の三部抄
―百人一首―明月記―近代秀歌―京極被進右府將軍抄―毎月抄―詠作時に於
ける心理狀態―景氣歌―和歌十體―定家の十體分類―詞の強弱大小―詠の教
授と個性―長歌短歌古今相違の事―越部禪尼の新勅選集評―六條家と争ふ―
定家の作と銘のうつた歌書―定本を作る―家隆卿口傳抄―五品と四品―五句

の名稱―色葉和難抄―歌仙落書―續歌仙落書―秋風抄

第十三、御子左家の歌學その三 爲家……………一〇二

爲家の守成―一橋を渡るやうに―真觀の難續後撰―八雲口傳―穩健主義―制詞―知家に攻撃された―運性陳狀―吹き絶えぬべき和歌の浦風―鶴に物をおはす―簸の川上―和歌用意條々

第十四、二條京極冷泉家の分立……………一〇七

三家の系圖―二條冷泉の相續争―四十三年に亘れる訴訟―相續争より歌の流派を生ず―夜の鶴―下の句より詠む―塔を組むやうに―阿佛の歌に對する理想―物のあはれを知る―乳母の文―毘舍門堂―鶉舟集の悪名

第十五、二條京極兩家の對峙……………一一一

世襲の結果株を守る―大覺寺統と持明院統―門戸争より偽書を生ず―連歌にて唐土へ渡らむ―爲世爲兼と軋る―爲兼東風に當てらる―延慶陳狀―爲世の主張―爲兼の主張―保主派と進守派―爲兼は歌の根本問題に觸れてゐる―遣心和歌集の序―心のままに詞の句ひゆく―心を物にあづけて―人麿赤人に憧憬す―萬葉の高と深と―野守の鏡―心を種として心を種とせざること―心を

素直にして心を素直にせざること——歌そらごと——詞を離れて詞を離れざるこ
と——詞は心の使——風情を求めて風情を求めざること——姿を倣ひて姿を倣はざ
ること——古風をうつして古風をうつさぬこと——幼子に鬼面——古典派と自然主
義——類型より個體——玉葉集——奇矯なる表現——歌苑運署事書——雨中吟と未來記
——三部抄——風雅集

第十六、二條家と冷泉家 附偽書……………二三

二條家と冷泉家の能繼者——兩家歌風の差異——偽書を生じた原因——桐火桶——頓
阿勘物——僞作たる理由——三五記——三十體——和歌と佛教との結合——沙石集の序
——愚秘抄——骨肉皮の三體——句切れ——僞書となすべき理由——愚見抄——竹園抄——
双對亂對親句疎句——鶯箱秘抄——よく詠むことの難き——汎語と殊語——造句法

第十七、頓阿と二條良基……………一三六

頓阿の略歴——井蛙抄——制詞の起る四原因——井蛙眼目——愚問賢註——保守と進歩
——三代集は明時の正雅——心と詞との關係——性情を吟詠すると廣く歌學すると
の可否——愚問賢註の註釋——草庵集——幽玄宗——二條良基の文學上の地位——近來
風體抄——連歌の隆興を圖る——心なき氏の耳に近く

第十八、反二條派……………一四三

耕雲口傳—故事口傳を斥く—新古今を理想とする—歌の本義と佛教哲學—和歌の第二義—いつも胸中に一大疑團のある如く—冷泉爲秀—貞世の略歴と著書—師説自見集—言學集—二言抄—辨要抄—落書露顯—頓阿は幽立一宗に偏す—二條派の淺薄を斥く—歌境と歌詞の自由を唱ふ—歌は心を養ふ爲—ただごと派の萌芽—無數奇の友を近けぬ—稽古の三時期—徹書紀—草根集—定家宗にて果てん—魔翫修羅の三つ目—二條派極信の體を斥く—批評は第一の稽古—さざめごと—相資相反—眞實の歌道は個々圓成—機根の生熟—枯野の薄有明の月—さびを貴ぶ—心の艶—篇序題曲流の解釋—時秀卿問書

第十九、一條家及飛鳥井家……………一五八

歌林良材集—小夜の寢覺—一條冬良—筆のまよひ—飛鳥井家系圖—和歌功能—歌道鈔

第二十、二條の末流及三條西家……………一六四

堯孝—東氏の系圖—東野州の著—東家三部秘錄—古今傳授—俊成當時の古今傳授—堯孝の古今傳授—切紙傳授の起る所以—三箇の大事—三木三鳥三草の

傳授—誓紙—一の物名が傳授を要するに至る徑路—堺傳授と奈良傳授—宗祇—吾妻問答—飛花落葉—遠情抄—分葉—かりねのすさみ—無常心と和歌—猪苗代兼載—月影と和歌—宗碩—三條西家系圖—詠歌之大概抄と音義—逍遙院—三内口訣—稱名院—三光院

第二十一、德川時代に於ける當流 その一 細川幽齋……………一七六

幽齋の略歴—勅使舞鶴城に下る—武士と和歌—歌道と王道—黒塗金九曜の紋入の長箱—當流の殉教者—耳袋記—受用集—耳袋記別錄—常住坐臥唱へてゐた格言—體を下句に用を上句に

第二十二、德川時代に於ける當流 その二 雲上……………一八一

後陽成院—名所方輿勝覽—智仁親王—後水尾院—一字御抄—類題寄書—玉露稿—勅講—類題和歌集—分類句集—古今類句—勅選佳句部類—懸元院の作例—初學考—六百番及千五百番作例—御系譜と御集

第二十三、德川時代に於ける當流 その三 堂上……………一八四

(甲) 烏丸家—光廣—面授口訣—歌道の本體—法橋友益の和歌遺言—大極圖

を歌道に擬す—資慶—細川丹後守—岡西惟中の續無名抄と退閑雜記—光雄—
 創作時の態度に就て—禪法を知らずば歌はよまれじ—續耳袋記—阪靜山の著
 作—日野家—江阪紀開—(乙) 中院家—和歌玉屑抄—將軍家へ傳授を拒む—
 類葉和歌溪雲抄—溪雲問答—三過説—莊子を見て歌を仕上げた—六窓軒—六
 窓塵談—知海抄と席話抄—歌は思慮分別に亘らず—(丙) 三條西家—實教—
 歌はただ皆戀—歌は位を本とする—精神の樂易を要とす—異なる風を各別に
 詠め—補正を急ぐな—三重韻を見よ—清水谷家—梅月堂略系—宣阿—野村尙
 房—伯水堂梅風—武者小路家—(丁) 飛鳥井家—飛鳥井家と知題抄—河瀬菅
 雄—眞名草—古今見聞抄—草木名所考と薦菰—惠藤—雄古語深秘抄を出す—
 (戊) 冷泉家—系圖—爲益の和歌雜談—爲滿卿和歌講談—爲久の歌學説

第二十四、當流に於ける地下派

松永貞徳—戴恩記—當流に於ける和歌三神—歌林樸楸—加藤磐齋—三部抄増
 註—神儒佛の三教をくるめて歌道に—説文的の歌の解釋—北村季吟—北村家
 の略譜—望月長孝—詠歌大本秘訣—和歌の三義—當流の虎の巻—詠歌本紀と
 詠歌大本秘訣との關係—詠道三科—詠歌本義に於ける歌學の分科—依田貞鎮
 白梅園鶯水—和歌淺香山—平間長雅—和歌血脈道統譜—片岡山と富の緒川—

目

次

有賀長伯—以敬齋聞書—和歌世々の采—歌道の普及者—有賀家の七部書—以立問答—加藤景範—名所ついまつ—濱づと—和歌虚詞考みやびごと玉葛—國雅管窺—貝原益軒の歌學—和歌紀聞抄

第二十五、堂上派の破壊……………二一六

自由討究の精神—破壊は建設に先つ—破壊派の陳吳—定家假名遣を難す—茂睡の宣言文—堂上攻撃の先驅—百人一首雜談—僻言しらべ—六條家の爲に回護す—梨本集—二條派に對する鐵鎚—定家は倅運の歌人—制詞は京極派を抑ふる爲か—遠慮すべき詞—主ある詞—詠むまじき詞—曲つた尺と直なる木—梨本集とその反響—鶏群の一鶴

第二十六、古學派 その一長流と契沖……………二二三

下河邊長流—枕詞燭明抄と續歌林良材抄—累塵集と萍水集—歌は國民の思を述べる言の葉—民間歌人の集續出す—季吟と契沖との比較—詞草正採抄—その門流

第二十七、古學派 その二荷田春滿……………二二六

春滿契沖の著書を愛讀す—創學校啓—復古學を唱ふ—萬葉は國風の純粹古今

は詠歌の精選―春葉集の序―戀歌を詠ます―春滿の歌に關する著書―古今傳授二十六冊

第二十八、德川中期に於ける堂上派……………三三

(一) 武者小路實陰及其の門流―逍遙院後第一の歌人―初學考鑑と詞林拾葉―保守主義の裏書―修養の必要を喻す―意を誠にするは歌道に過ぎたるはない―無心無相―俗情と世智―自然を尙ぶ―實陰卿の門流―似雲―詞林拾葉と磯の波―柘植知清―濱木棉と片絲

(二) 烏丸光榮及其の門流―今人麿―和歌教訓十五條―内裏進上卷―以實爲專―松平筑前守に送る書―自然の歌―心と所作の一致―論語を會讀するが歌には第一―日野資枝―歌合目錄―詠歌一體備忘―亨辨―和歌童翫抄―再治視聽筆削―加藤信成―妻谷光貞―寂翁―遠藤胤忠―小島則榮―有栖川宮家―職仁親王―織仁親王―門人

(三) 冷泉爲村及其の門流―冷泉家と二條派との近接―花郭公月雪物語―靈夢と感應―人麿の尊像百體―道と心と戀歌との關係―正風の解釋―歌三昧に入る―爲村の門人―宮部義正―澄覺院聞書―石野廣道―泉石抄―大澤隨筆と蹄溪隨筆―萩原宗固―一葉抄と山路の花―源義亮―國風隨と石上―寂明―歌

道根元問答

(四) 姉小路芝山等諸家及其門流—歌道秘藏錄—風竹亭和歌式—芝山家—重豐の説—芝山持豐の説—多田義俊—秋齋歌話—桂花抄—古歌を見る五様—和歌土金傳—深田正韶—聲調極秘傳

第二十九、漢學者の見たる歌學説と其の反駁……………二五四

物徂徠の歌學説—春臺の獨語—復古説—歌は定家より衰へた—漢詩の變遷を和歌に擬した—俊成天台の佛法にかぶれて歌が理窟ほくなつた—萬葉から三代集を千遍繰返せ—濱田孝國の獨語辨—詩歌同趣説を斥く—唐詩と和歌撰集との比較は中らない—風體の變遷を詞の變遷に基くといふ説を駁す

第三十、古學派 その三 荷田在滿と國歌八論……………二五八

國歌八論—破邪の方面—歌の本源—歌は音樂的から繪畫的と變遷した—和歌の功驗を過大視せず—歌は娛樂か國粹かの爲に詠む—用語論—在滿と眞淵とに對する作蓄蹊の批評—標準を新古今に取る—後京極攝政を軌範とする
(一) 田安侯の國歌八論餘言—歌道には理と技の二つがある—則を古に仰ぐ—時世と歌との關係—歌合始まつて歌道廢る—國歌八論再論—歌體約言

(二) 賀茂真淵の批評—八論餘言拾遺—國歌論臆說—再奉答金吾君—宗武侯

と眞淵との意見の差異—國歌臆說辨疑と歌論—詩と歌—to對する眞淵の考

(三) 大菅公圭—質より文に赴くは自然の勢—古體今體兩様に詠め—言の文質は定準なし—古今に香火し貫之に尸祝せむ—小倉百首批解—季吟を評す

(四) 宣長の八論評—八論斥非評

(五) 菫蹊の八論評—出れるを矯め直きに過ぎた—花を知つて質を忘れる—萬葉と新古今の比較

(六) 爾餘の八論に對する評論

第三十一、加藤枝直の歌論……………二七三

歌の姿古今を論ふ詞—千載新古今は亡國—調—古今と萬葉との比較—結句に四三と三四の別がある—松山觀山和學篇—松山俊仍に答ふる書—子に與ふる文—漢名の分類を用ひてから古事記の歌の名が亡んだ—新撰和歌集は偽作か—俊成の判詞を貶す—南山雜記

第三十二、古學派 その四 賀茂真淵……………二七七

和歌教訓—徂徠が漢學に行つたことを國歌國文の上に—眞淵の眼に映じた萬

葉—萬葉解通釋と萬葉大考—萬葉の研究は一切の風雅の本—萬葉新採百首解の序—眞淵とスコット—時代の變遷と個人の作風—歌風小言—龍の公へ—歌意考—新學び—調の説—丈夫の風手弱女の姿—天地の調—女性と作風—新學びに關する批評—縣門の人々

第三十三、縣門 諸家……………二八五

田安宗武の歌體約言—摘要冠辭考—楫取魚彦—服部高保—内山眞龍—長歌の形式を圖解す—海量—徳種—續萬葉異本考—古今の序を疑ふ—槻の落葉と信濃漫錄—宣長の歿後その歌論を駁す—歌の風致論—花園春里の風致論辨—丘岬俊平—百千鳥—復古主義—和歌の變遷を論ず—はしがきぶり—詞草小苑—片歌の興隆を謀る—青木蒼根の葦垣

第三十四、古學派に對する反對及辨駁……………二九一

赤井一貞の管見問答—復古主義は政道に背く—天子の御流儀は天下の流義—澄月の和歌爲隣抄—草庵集は和歌中興の龜鑑—定家卿の定本には一字をも加ふべからず—和歌の浦の汐合一滴の味を知らず—他の學問を捨てて歌を詠め—戀歌の心理過程—隣女晤言—二十一代集概覽—古學を奉ずるものは異端—

濱臣の朝敵辨—塵泥中に於ける蘆庵が意見—伴蒿蹊が評—用語に於ける尙今派—景樹の新學異見—眞淵の調の説を斥く—時運の然るべきことを國土の上にかけていふ—強い方が鄙俗でやさしい方が文華—擬古を斥く—鎌倉右府の歌は見るべからず—今世の歌は今の辭で今の世の調—百首異見—本間素當—新學考異見—景樹の自然説を排す—今の大御代姿といふのは何か—古今は萬葉には比較にならぬ—中島廣足の新學び異見評—業合大枝の異見辨—山平伴鹿の新學異見辨—感情即調と見做すは誤—木に住む鳥が枝を枯す—心の主、詞の奴をつかふ—復古を妨げる外道—戸澤正令侯の詞のしもと

第三十五、たゞごと派……………三〇五

古の中道—クラシツクを嫌ふ—塵泥蘆かび及或問—歌の教を講つた十二詠—用語の自由を作物上にあらはす—材料に制限を置かず—形式に拘泥せず—歌は詮する所一句に收まる—宣長及山陽の蘆庵評—三義説—古今宗—同化主義—瞬間をそのまま詠ふ—新情説—蘆庵の著作—小林斐成の古の中道辨

第三十六、折衷派の歌學……………三二三

和歌四天王—伴蒿蹊—國歌或問—風を一體に定めるは堂上のごと—擬古派を

斥く―我等に親しい詞を望む―心詞も萬の水をやる如く―尙直論―門田の早苗―戀歌論―國歌の六體

第三十七、六 義 論……………三二八

周詩準擬和歌―樂歌類經總目―由伎麿の六義考―からうた六くさの解―蘆庵の六義考―六義口訣―和歌六體考―漢學者の六義說

第三十八、北邊家の歌學 その一 成章……………三三二

有栖川宮より歌道御傳授を受けた―三具―和歌六運說―六撰辨―七體七百首―五體―のばへ歌―よせ歌―よせとうちよせ―むかへ歌―まもらへ歌―かさね歌―詠歌法―創作上の四過程―五級―五級三差辨―四知―和歌梯と大海のはし―假名札五式と送鎖式―富士谷の門流

第三十九、北邊家の歌學 その二 御杖……………三三九

歌袋―六則―歌の内的外的要素―創作時の心理状態―歌境は盡きることがない―珍しき詞と先達の詞―庶幾すべき姿―究極の風體―詠格―する詞と影詞―詞葉新雅―歌道非唯抄―二十七法―吟南辨の夷則―和歌入紐―填字法と帖括―百人一首燈―かはほりと古事記燈打計智―髓腦と眞言辨―和歌の目的は

情念の調節にある時—宣説—歌道と神道の關係—心情の分橋—偏心—一向心
眞心—行爲の分類—空爲、私爲、公爲、眞爲—神道野道の領域—髓腦の神道
篇—私心と公身—歌は即眞—戀歌は道の正當—言語と詠歌との別—言語の形、
詠歌は有形—一種の言靈説—靈の本體—言靈と感通—詠歌の時—神徠—
表裏境—あゆびから裏の境を推す—五典—境と旨趣と體と仕上—謬道學界—
門人

第四十、本居宣長の歌論

石上私淑言—歌とは何ぞ—歌の範圍を廣義に取る—歌の起原—歌は何により

三四六

て發生するか—物のあはれを知る—紫文要領—歌と文の境界—物のあはれは
歌の生命—眞の歌—技巧の歌—詩と歌との比較—文學獨立論者の先驅—歌は
戀を旨とする—排蘆小船—眞幸千蔭問答評—古今風歌説—新古今を規範に—
うひまなび—古風後世風—新古今には前なく後なし—七五調が當世に適する
—鈴屋門人

第四十一、橘千蔭村田春海の歌學

千蔭の略歴—與小野勝義書—富小路貞直卿へ答ふ—芳宜園歌話—歌がたり—
雲井の雁—己が姿を立てる—近體古風派を斥く—新古今派を攻撃す—長歌の

三五六

獎勵—長歌の三の姿—古今集信者の京都派を攻撃す—雅俗説—歌に關する他の著作—漢詩と和歌との比較—千蔭の門流—春海の門流

第四十二、桂園派……………三六四

景樹の略傳—庭の教に違ふとも—大天狗—歌の狂—切支丹の宅—歌狐—江戸派との關係—ル—テルの宗教改革を唱へた俳—桂園の歌學—東場亭聞書—桂園遺文—隨所師説—古學者の難問に答ふ—雅俗は調にある—調は歌の生命—穂井田忠友の質疑—天下の三大事—五感中舌唇の二官が重い—感は調にある—歌は神人感應の具—調のはたらき—調は姿—最上の感は端的の感—桂園—枝批評—桂園派の門流

第四十三、江戸派と京都派との交渉……………三七六

小川布淑の雅俗辨—雅俗は言語にはある、心に雅俗はない—讀雅俗辨—起居動作も歌の心に合せよ—佐々木眞足の雅俗論—論雅俗辨書—昇道の雅俗再辨—情及詞の雅俗と歌との關係—春海の説を駁す—たゞごと歌は歌の大本—たゞごと派は六義を統べる

第四十四、伊勢派と江戸派の交渉……………三八〇

本居大平—八十浦の玉—春海より大平に送る第一書—太平の答書—古風後世風の境界—春海の第二書—眞淵の歌學論には三つの變遷がある—ささ柴—明道書—橋平歌評—佐須奈邊—難字氣良賀花—竹箒—歌がたり斥非—千尋栲繩—月の光—黄泉の掟

第四十五、鈴屋門流の歌學……………三三四

本居春庭—歌を語學に結び付る—竹下直道—歌はもとより—大平の五七材—横井千秋の詩歌論—林圀雄の興歌の説—詠歌大概は偽作—八重疊—平田篤胤の歌學—技藝的の餘裕をもたぬ氣吹の舍—藤井高尙—佐喜草—歌のしるべ—歌の情は常の意と異なる—たゞごと派と正反對—古風近體説もよくない—深情説—伴信友—詠歌考—神樂歌は鄙び歌

第四十六、千蔭春海の門流の歌學……………三九〇

本間游清—岸本由豆流—高田興清—作歌故實—清水濱臣

第四十七、歌格の研究家その一—小國重年……………三九三

すさみ草—海量が説—宣長の説—眞龍の考—小國重年—長歌珠衣—長歌を句數によりて三つに分つ—對句を基本とす—對句の統計—對句によつて歌の時

代の新古を知る—歌人に由りて慣用の對句同じからず—石塚龍麿が真葛葉

第四十八、歌格の研究家 その二 橘守部……………三九七

守部宣長の學說の向を張る—萬葉摘翠抄—三撰格—語脈の斷續—古歌は一しきりに二句謠ふ—四句絶、二句絶、三句絶、一句絶—短歌は打返し詞を増して謠ふ—長歌は雅樂の曲譜で謠ふ—天語歌は餘言歌—音聲歌合—歌の起原—八雲の神歌は三十一字歌の起原でない—神代の歌は雅樂寮の謠—長歌本位—反歌の義を音律上から來たとする—虚句と實句—實句止め—連實光彩方邊—脩句の發生—句格十三法—風韻と字眼とを知らしむ—萬葉緊要—自餘の緊要—心の種—虚字詠格—歌使雁のゆきかひ—五十一番歌合

第四十九、歌格の研究家 その三 本居内遠……………四〇九

古調辨—二句一章を本となす—混本歌が歌の本—長歌短歌同體の說の起—芳樹の說は内遠の說に由るか—五七調の發生に就て—言詞本末辨—五七調の正格と三纏格—上三、下二句の調は詩の影響—七言の分析とその作用—諸體の重複せる長歌の形式—國粹的古道說—内遠の門人

第五十、歌格の研究家 その四……………四一五

伴信友—いろは歌は梵讚の系を引く—梵讚漢讚には我が歌と似たるものがある—催し樂は唐樂の調に由つたもの—穂井田忠友—今様は支那の越天樂の調に倣つた—田中芳樹の古風三體考—神樂の大前張の本末の分から五七の格が崩れた—長歌は短歌から出た—長歌の正調及變調—反歌の解釋—寄居歌談—西田直養—聯句抄—長歌格調考—萬葉長歌格—七種の格調—篠屋漫筆—詠歌
眼目

第五十一、桂園の門流……………四二二

木下幸文—櫛のあか—眞情説に基き宣長の説を駁す—乗手のない車に出し衣—宣長と幸文の説の批評—熊谷直好—沒理想無技巧主義—歌は苔の如し—極端な自然説—八田知紀—調の説—調の直路—しらべと喉普及齒音—正義總論補註論—桂園派の調の説を補正す—牧島考—千代の古道論—谷千生の心のよるかた—内山眞弓—新未—下和玉とみさびえ—高橋正澄—一言—義派の音靈説—縫目結目—和歌六體考—兒山紀成—遠山彦—桐の落葉—景賢問答—香川景恒—渡忠秋のかた糸—竹内享壽

第五十二、歌格の研究家その五 鹿持雅澄……………四三一

雅澄の著作—奈良朝以往の人と交る心にて—長歌結尾の四種—五七の位—五七の重疊—語勢三則—端文と發端—古道大意—闇夜の磔—月夜の燭

第五十三、歌格の研究家 その六 …………… 四三五

中村知至—長歌規則—對句を基として正格變格を分つ—修辭の五種—五十嵐篤好—歌學初訓次調及三調—湯津爪櫛—歌の詞と息遣ひ—古歌の七五調—雀部手末が説—西原晁樹—宇多鷲太利

第五十四、歌格の研究家 その七 草鹿砥宣隆と野々口隆正…………… 四四〇

草鹿砥宣隆—旋頭歌四體—天門抄—序歌抄と長歌類句類集—野々口隆正—六句歌體辨—旋頭歌の五種—混本歌の三種—佛足石の歌—譚返し

第五十五、歌格の研究家 その八 六人部是香…………… 四四五

長歌本論—長歌玉琴—歌の根元—五七調の復古を希ふ—長歌に新語を用ひて宜し—格調の變遷—長歌の格失はれて短歌に長文の序を加へる—製作上より五格を立つ—構想の二様—對句の八種—機轉に依つて歌の巧拙は分る—長歌の局面の變化—體裁八則—古今集撰考—古今集假名序及眞名序論—箴の玉籟—神於呂之神歌考—紀記歌撰と楡の撰葉—長歌學柱—歌格分類抄—千木の

片そぎ―旋頭歌解―古歌韻解―神風の伊勢の海―男歌と女歌―江澤恒久の今
様考―今様の三體―近藤清石の説

第五十六、德川末期より明治の初に至る歌學者 その一……………四五五

三派鼎立―吉田令世―聲文私言と歴代和歌勅撰考―鶉舟のすさみと道の八十
隅―東湖の歌話と水戸學の色彩―松岡明義と伊達千廣が歌の説―加納諸平―
伴林光平―國の池水―飯田年平―石園歌話―稻木抄―垣内の七草―橘曙覽―
圍爐裏譚―井上文雄―伊勢の家苞―家集を尙ぶ―氣慨の歌洒落れた歌を獎め
る―井上淑蔭―歌格新論―歌格諺話―堀秀成―伊勢家苞辨―歌の姿の論―古
今集序文義考

第五十七、德川末期より明治の初に至る歌學者 その二……………四六〇

海野幸典―ただごと歌の辯―千家尊孫―比叡能歌語―半井梧庵―歌格類選―
松田直兄―ことばの直路―三宅意誠―言葉の直路辨―黒澤翁滿―獨學綱―活
氣を離れて感通なし―岡部東平―七禁考―長野義言―譌の大武根―鈴木雅之
―歌學正言―情と言と調との關係―歌風の三様―中島廣足―宇奈爲乃須左備
―後の歌がたり―殿作り―鈴木重胤―黒川春村―萩原廣道物―集高世―佐々

木弘綱

第五十八、徳川末期より明治の初に至る歌學者 その三 前田利保……………四六七

龍澤公の略傳―鳳凰連―和歌の徳―和歌の本義―時運の差異―近隣―歌道隨筆―活用雅言風調辯―古今集夜話抄―游翁から印可を受けた―今年今月今日の風―現代語で個性を詠む―山彦傳―風體と調―園のすて草―五體―歌判記―憶―對語六等―むかひこと道行囀―新六義說―題詠の心得―詞の大綱―詞の綱手―手繰の糸まき―國頌專問―國頌專問嘉々―眞の歌―玩辭象―歌の本義を易の理に附會す―六龍神用―歌道は天と合理するを致とす―清薫日知抄―調の説―秀歌の四種―句去―洒落―重疊―謎々

第五十九、徳川末期より明治の初に至る歌學者 その四 大隈言道……………四七八

天保の歌―商人の歌―ひとりごち―こぞのちり―自己を如實に詠ふ―自己の周圍を歌へ―木偶の歌―初山踏を評す―新學と新學異見との評―眞面目の外戯れた歌も詠め―時世相をさながら寫せ―古人に對して自分を立て

第六十、明治時代の斯壇の一瞥……………四八二

文明開化の語に引きずられて―新體詩―國學和歌改良の聲―リズムの研究―

無韻非歌論—外國の詩を見た眼で國歌を考へる—淺香社—文學界と藤村—大
和田建樹—帝國文學—山の散文詩—心の花—鐵幹と明星—竹の里人と根岸
短歌會—武島羽衣—雷會—大日本歌道獎勵會—新派と舊派との争—藤村と晚
翠—薄田泣菫—純文社と白百合—上田柳村と象徴派—蒲原有明—心のあと—
海外思潮の輸入—文庫派—口語詩の唱道—日本歌學史と歌學論叢—白秋と露
風

第六十一、結

論

四九一

歌學の過去—歌學の起—上代の歌學—中世の歌學—沈衰期—啓蒙的傳統的—
近世歌學—第一期—第二期—第三期—戀歌論—第四期—近代歌學勃興時代—
我が歌學の將來—歌の本質—形式—創作時に於ける心理狀態—歌の體裁—技
巧と無技巧—あらまほしきこと

目次終

目次